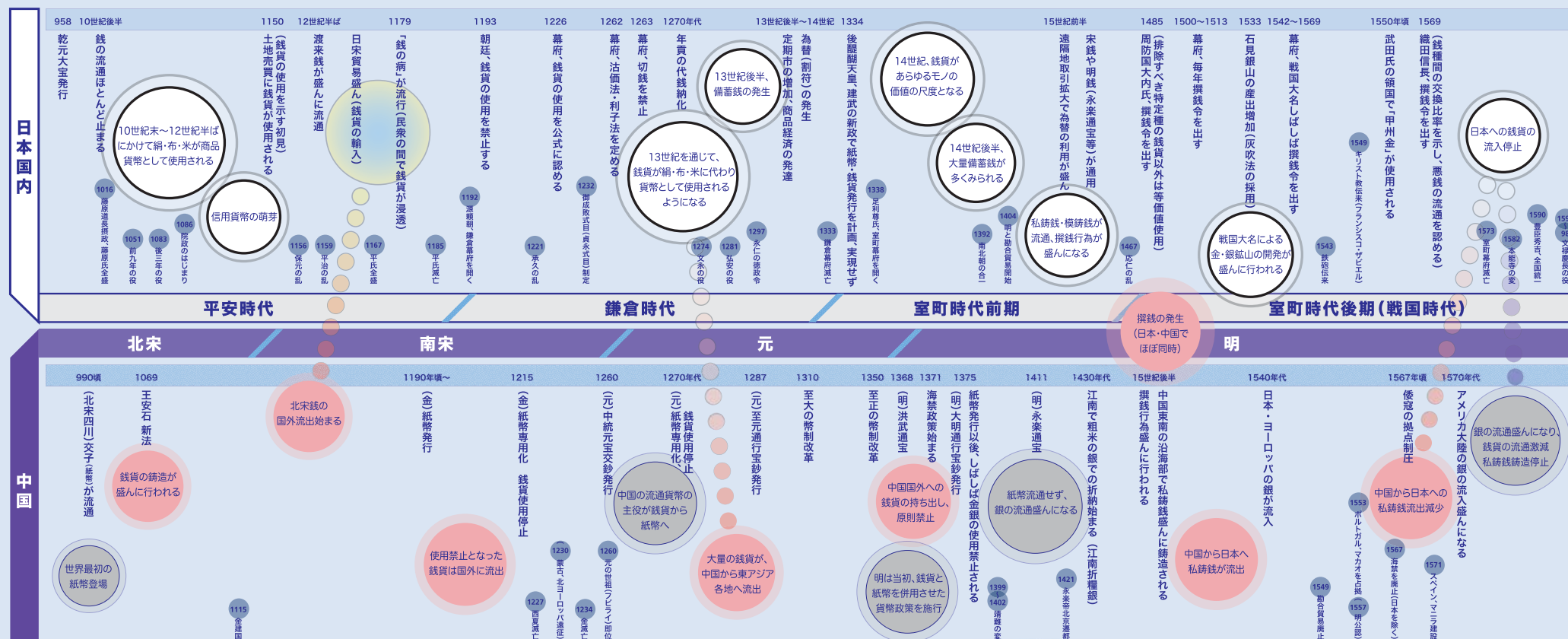


商品貨幣から渡来銭の時代へ

日本国内では、958(天徳2)年の乾元大宝発行を最後に銭貨はつくられなくなり、人々は銭貨の代わりに米や絹・布を貨幣として使っていました。
12世紀中頃になると、中国の銭貨(銅銭)が大量に流入するようになり、人々の間で銭貨が再び貨幣として使用されるようになりました。



渡来銭とは？

渡来銭とは、海外から渡ってきた銭貨のことです。10世紀末から16世紀まで国家による銭貨鑄造が行われなかった日本では、渡来銭が貨幣として流通しました。

渡来銭はどのように運ばれてきたのか？

渡来銭は、公貿易・私貿易によって、海外から運ばれてきました。室町幕府と中国(明)との貿易では、一度に数千枚の銭貨をやり取りした記録が残されています。



日元貿易船復元模型
(国立歴史民俗博物館蔵)

銭貨1枚=1文

中世の日本では、銭貨であればつくられた国や時代は関係なく、1枚1文で使用できました。

大量出土銭の裏の中には、さまざまな文字の刻まれた銭貨が一緒にいられています。

中世日本の遺跡からは銭貨が出土することが多く、1箇所から数千枚から数万枚の銭貨が出土することもあります。



銭貨7,700点が入って出土した壺
(佐倉崎泉西日野都賀岡村出土)

日本の遺跡から発見される銭貨

銭貨は、中世日本の多くの遺跡から発見されます。その数量は、1枚から数十万枚までさまざまですが、日本の中で大量の銭貨が流通し、富として貯蔵されることもあったことがわかります。



面磨志海苔出土銭(14世紀後半)
30万枚以上の銭貨が出土
(市立図書館蔵)